

身体事例 1 障害者支援施設からアパートへ地域移行をする方の支援**事例概要**

佐藤 真様（仮名）57歳。両下肢欠損、身体障害者手帳1種1級

昭和33年、福岡県の北九州市で生まれる。地元の小学校、中学校を卒業後、福岡市にある県立高校に入学する。大学への進学は、家が貧しかったため私立をあきらめ国立大学に進んだ。

大学卒業後は父と共に工務店を経営し、建築作業員として働く。店の経営は順調であったが、昭和62年、本人が29歳の時に父が糖尿病で倒れる。父は入院しなければならず、工務店の仕事が自分にのしかかってきてしまう。

本人は毎日の忙しさに耐え切れず家を飛び出し、東京の親類の家に身を寄せて働き始める。父は3ヶ月の入院後に退院したが、右麻痺が残って杖歩行となったため建築の仕事をするのはできず、店をたたむこととなった。同居の母は父の糖尿病の管理ができず、父は再入院してしまう。5ヶ月の治療の効果もなく、父は死亡。母は看病の責任感を感じ、後を追うようにして亡くなった。

本人の東京での仕事はどれもうまくいかず、上司と意見が合わないなどの理由で仕事が続かなかった。親類とも些細なことでトラブルを起こして、その家を飛び出し、千葉県の船橋市でアパート暮らしを始める。預金がなくなったために生活保護を受給することとなった。

平成24年、突然意識が薄らぎ、自分で何とか救急車を呼んで救急医療センターに運ばれる。原因は糖尿病の悪化であった。担当医師から両足の切断を告げられ、仕方なく承諾する。救急医療センターでの治療は終了し、海浜リハビリ病院→大石記念病院→北総東病院を経て、平成26年9月より障害者支援施設「みどりの丘」に入所している。

ポイント

- ① 障害者支援施設ではいろいろな方が生活をしている。在宅で生活をしていて利用者本人の状態が悪化した場合や介護者の支援ができなくなった場合などに入所することとなる。
また、入院時に治療がほぼ終了したが、在宅での生活が困難な方の場合も施設に入所することが多い。しかし、本来の生活の場所は施設ではなく、在宅で生活できる方も大勢おり、今回はそのような方の支援を考える。
- ② 施設でいろいろと制限を受けることがあり、ある程度は入所者に我慢していただいているが、それも限度がある。そして可能性があれば在宅での生活を考えていきたい。
- ③ 今回は両足欠損の障害者が、地域のアパートで単独生活をするための支援である。バリアフリーのアパートを提供し、両足が欠損していても生活ができるようにしていく。また、アパートの近くに車椅子で移動することができるコンビニや商店、スーパーなどがあると望ましい。さらに、車椅子対応のバスや電車などが利用できると本人の活動範囲を広げることができる。
- ④ また、在宅生活が出来ても、日中に活動できる場所は必要と思われる。本人があまり拘束されずに気楽に参加できる場所を考えていく。